

国際大会調査報告書

時代や社会の変化に適応した次世代スポーツイベント

第1回 FIG パルクール世界選手権: 東京、有明

作成: 独立行政法人日本スポーツ振興センター 情報・国際部 国際戦略課

協力: 一般社団法人日本アーバンスポーツ支援協議会

本レポートは、日本スポーツ振興センター(JSC)が、2022年10月14日～16日に行われた「2022 Parkour World Championships」(パルクール世界選手権 2022)の視察及び関係者などからのヒヤリング情報に基づき作成したものである。

キーワード:

- ・アーバンスポーツ
- ・東京 2020 レガシー
- ・将来のオリンピック種目候補
- ・コンパクトなイベント運営
- ・ファンエンゲージメント
- ・若者、都市型

アーバンスポーツとパルクールの背景

IOC が描く、アーバンスポーツの将来像

アーバンスポーツの推進は、国際オリンピック委員会 (IOC) が掲げている「オリンピック・アジェンダ 2020」の指針の中で、若者世代のスポーツ離れを食い止めるための方策のひとつとして取り上げられている。「伝統的なスポーツだけでは生き残れない」と大会の斬新な改革に取り組もうとする IOC の狙いが見受けられる。3x3 バasketボール、スポーツクライミング、スケートボード、BMX フリースタイル、そしてサーフィンは東京オリンピックから採用された新しい種目である。パリオリンピックではブレイキン(ブレイクダンスの競技版)が追加種目となる等、アーバンスポーツを取り巻く環境は大きく変化している。

また、IOC は 2024 年パリオリンピック大会の出場枠を争う「予選シリーズ」をスケートボード、スポーツクライミング、BMX フリースタイル、新採用のブレイキンの 4 競技同時開催で行う予定を発表している。全ての競技の選手を集め、4 日間開催の都市型イベントを 2024 年 3～6 月の間に計 3 大会実施予定である。これはオリンピック改革の新指針「オリンピック・アジェンダ 2020+5」に盛り込んだ改革案のひとつで、IOC と

しては世界各地で若者世代を取り込んだ新たなコンテンツ開発に積極的に取り組んでいる。非オリンピック種目やパラリンピック競技においても、公園や路地裏などで身近で楽しめるアーバンスポーツの導入を推進している。従来のスポーツから楽しむスポーツ、さらには遊びの要素を取り入れたアクティビティをスポーツと捉えるものとして、アーバンスポーツに関心が向けられている。

さらには、現在 IOC と各国際競技連盟との間で、2028 年ロサンゼルスオリンピック実施種目プログラムの選定に向けた個別協議が進められており、パルクール等を含めた新たなアーバンスポーツ種目の採用に向けて、これまで以上に注目が集まっている。¹⁾

パルクール: 体操種目の次世代スポーツ

フランス発祥のパルクールは、若年層を中心に近年注目を集めているアーバンスポーツのひとつである。街並みに見立てた特殊な仮設コースの上で繰り広げられる競技は、特別な器具を使用する事もなく、選手の身体能力のみで様々な障害物をアクロバティックに乗り越えて移動し、スピードや技を競い合う。動作には走る・跳ぶ・登る等様々な技術が含まれている。勿論スポーツとして見ることもできるが、その芸術性からパフォーマンスやアート、そして街中での移動術のライフスタイルとして、人によって捉え方は多岐に渡る。

パルクールは 2017 年に国際体操連盟(FIG)の正式種目となり、それを機に世界各国が取り組み始めてから、今後 2028 年のロサンゼルスオリンピックで体操競技の種目の一部として追加される事が期待されている。今回東京で行われた世界選手権も、2018 年から毎年行われている FIG パルクールワールドカップの日本を含む世界各地での成功を受けて、実現した。²⁾

東京 2020 大会のアーバンスポーツレガシー

東京 2020 大会で始まったオリンピックにおけるアーバンスポーツブームは、東京 2020 大会のレガシーの一つと言え

る。そのレガシーを継承し、発展させていくためにも、今回東京で開催された第1回目となるパルクール世界選手権は非常に重要なメッセージとなった。

また、レガシーイベントを実現させる為、東京都は一般社団法人日本アーバンスポーツ支援協議会と協力し、この大会に併設して「アーバンスポーツ TOKYO2022」イベントを開催した。ダブルダッチ、BMX フラットランド、ブレイキン、ヒップホップ、パルクールのデモンストレーションや一般の方が参加可能な体験プログラムが行われ、さわやかな秋空のもと、競技のほとんどが無観客開催となった東京大会では味わえなかったアーバンスポーツの祭典でその魅力に触れていた。またオリンピックで使用されたスケートボードの施設をジュニアの選手に開放した「アーバンスポーツ TOKYO2022 スケートボードフェスティバル」も開催し、多くの若者世代や若いファミリー層がアーバンスポーツをライブで体感・体験する機会となった。単一競技のみのイベント開催にとどまらず、複数競技が連携して合同でイベントを開催することにより、イベントの盛り上げや認知度向上、来客数の増加に相乗効果をもたらした。^{3,4,5)}

一般社団法人日本アーバンスポーツ支援協議会

2017年に、日本のアーバンスポーツの普及促進と東京2020大会の機運醸成のため、一般社団法人日本アーバンスポーツ支援協議会を設立。取り組みの第一歩として、協議会が主体となって FISE 広島大会の開催を担ったほか、アーバンスポーツ競技の各大会の後援、イベントや体験教室の開催等を進めている。全国でアーバンスポーツに関連する施設は年々増えており、スポーツ参加や観戦等、スポーツをかけた地域活性化の推進のために、アーバンスポーツを施策に取り込む動きも見られる。アーバンスポーツは、一つひとつの競技はまだまだ成長段階であるため、日本アーバンスポーツ支援協議会では、「アーバンリーグ構想」を検討している。これは主だったアーバンスポーツをすべて集めた大会やリーグを各地で実施することで、アーバンスポーツのできる施設を各地に残し、競技場所として定着させる事を目指すものである。⁶⁾

第1回 FIG パルクール世界選手権

開催概要

日時:2022年10月14日(金)～10月16日(日)

会場:有明アーバンスポーツパーク(東京都江東区1丁目7番2)

主催:国際体操連盟(FIG)、(公財)日本体操協会(JGA)、(一社)日本アーバンスポーツ支援協議会(JUSC)

共催:東京都

後援:(公財)日本オリンピック委員会

主管:第1回パルクール世界選手権実行委員会

競技種目:

パルクール・スピード(男子、女子)

パルクール・フリースタイル(男子、女子)

一般参加者、観客動員:3日間/約13,000人

入場:無料(オンラインによる来場申請が必要)

関連イベント:URBAN SPORTS TOKYO2022、Skateboard festival、アーバンスポーツ・デモンストレーション&一般参加体験

施設の管理・運営について

東京2020大会の為に整備されたスケートボード競技会場の横のスペースにパルクールの仮設ステージを設置するとともに、その周辺にあるスペースも有効活用し、様々なアーバンスポーツの仮設ステージが設置されていた。現在国際スポーツ界でも大いに取り上げられている「既存施設の活用」を上手く他のアーバンスポーツと一体化したイベント開催により、実現していた。

仮設の設備自体は、世界選手権規模の設営だった為期間は1週間ほどを要し、設営を含めた全体費用は約2億円となっている。過去の事例では、国内大会であれば最短1日で設営し、費用も2500万～3000万円の設営費で行った例もある。

今回の施設の活用は、東京都が2022年1月21日に公表した「TOKYO スポーツレガシービジョン」の、都立スポーツ施設の戦略的活用の一部ともいえる。東京2020大会のために整備され、今回も使用されたスケートボード会場も含む「有明スポーツパーク(仮称)」の整備をすでに正式に発表しており、

スケートボードのみならず、スポーツクライミング(ボルダリング)の出来る屋内ボルダリング棟や、3x3 バasketボールコートと同じパーク内に整備し、2025年3月にオープン(2035年2月までの期間限定運営)を計画している。今回のイベントは、それらの計画に向け、そしてアーバンスポーツの聖地として有明を充実させるための大きなステップとなった。⁷⁾

仮設での運営には利点が多かったものの、課題もいくつか見られた。一つ大きなものといえば、雨天時の対応である。仮設の設備では屋根がない競技施設となり、初日のスケジュールは降雨により大幅に変更を強いられた。観客席やアスリートエリアも設営には限界があり最小限だった為、運営費用や時間を鑑みて優先順位を決めなければならない。



図1:アーバンスポーツ TOKYO2022、そしてパルクール世界選手権の大会のマップ。©JUSC



写真1:パルクール会場の設備。奥に見えるテントは、VIP とジャッジ(審査員)の位置。©Japan Sport Council



写真2:パルクールの設備。観客は競技の目の前での立ち見席となった。©Japan Sport Council



写真3:パルクールのアスリートエリア。©Japan Sport Council



写真4:パルクール会場の真横に位置するスケートボード施設。東京2020で使用された。©Japan Sport Council



写真5:アーバンスポーツ TOKYO2022にて、アーバンスポーツの体験・デモンストレーションステージ。©Japan Sport Council



写真6:休憩・飲食広場。©Japan Sport Council

ファンエンゲージメント向上への取り組み事例

アーバンスポーツの特色としてファンエンゲージメントがあげられる。ファンエンゲージメントとは、アスリートとファンとの強い繋がりや関係性を示す。観客の手が届くような近い位置で観戦できるアーバンスポーツならではの競技観戦体験が、迫力のある戦いと相まって観客を魅了していた。ファンエンゲージメント向上への取り組み事例のいくつかを紹介する。

大型 LED ビジョン:5m x 15m のビッグスクリーンを導入した事により、どうしても観客から見えなくなってしまう場面をしっかりと見逃す事なく観戦出来るスタイルを確立。

新しい形の開会式:国毎に選手が呼ばれる中、選手たち自身が国旗を掲げ次々と観客の目の前の競技ステージに上がっていくスタイルは、ファンにとって迫力のある新しいスタイル

であった。ステージの段差等を使い様々な場所へと国旗を広げながら上がっていく姿は、まるで世界地図を作っていくようであった。

実況や音楽:特に若いファンを取り込むような音楽と実況アナウンスやアスリートの観客へのパフォーマンスが、より人を虜にする新たなファンエンゲージメントの形を作っていた。

デジタル技術の活用:アーバンスポーツの専用アプリを使用。BMX、スケートボード、ボルダリング、パルクール、ブレイクダンスなどのイベントやコンテンツ等の情報を提供しつつ、今回の大会では、アプリ画面に表示した QR コードにてスムーズな入退場を可能にしていた。またスマートフォンからライブ配信動画が簡単に視聴できる等新たな観戦スタイルが推進されていた。[\(https://urbansports.app/\)](https://urbansports.app/)



写真7:パルクール競技中、観客は間近で選手のプレーを感じることができていた。©Japan Sport Council



写真8:開会式の様子。©Japan Sport Council

東京都の取り組み、スポーツレガシー

東京 2020 大会から 1 年以上が経過し、現在日本ではそのレガシーをどう継承していくかが重要なポイントとなっているが、今回のパルクール世界選手権とアーバンスポーツイベン

トはまさにレガシーイベントだったと言える。東京 2020 大会の施設活用に加え、ボランティア、イベント運営や施設運営には多くの東京 2020 大会経験者が関わっていた。東京大会を契機として構築された競技間のネットワークを最大限に活用し、東京大会に参画した異なる競技団体や民間企業・自治体関係者がボランティアとして参加していた。

また、東京 2020 大会で歴史的な開幕をしたアーバンスポーツを今後レガシーとして残す為に、パークール世界選手権に付随して行われたアーバンスポーツイベントは効果的であった。様々なアーバンスポーツを多くの市民の方に体験してもらい、プロ選手たちとも交流してもらう事によりアーバンスポーツに対する親近感や理解を高め、そして今後のスポーツへの普及イベントとしての成功例の一つとして今後も活用されると思われる。

こうしたレガシーイベントは若者層からの人気も高いことから、多くの若者世代が関与できる可能性があり継続されることが期待される。東京大会のレガシーの長期的継承において若者層の関与は不可欠であることから、こうした新種目の実施を通してどのようなレガシーを創出し、若者世代に体験・共有するかは今後の重要なポイントになるものと考えられる。

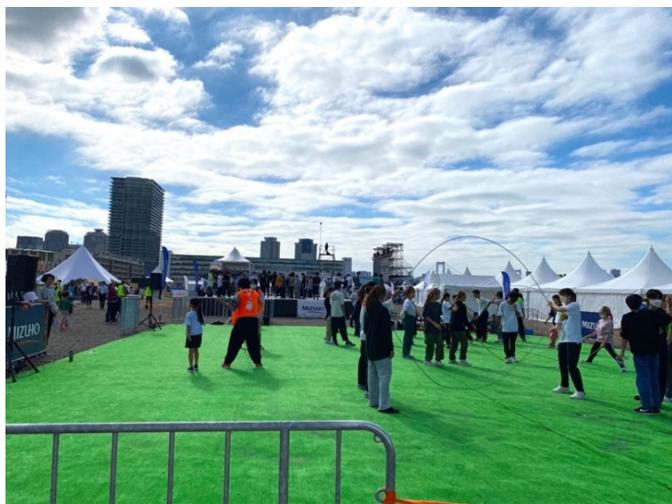


写真9:ダブルダッチ体験の様子。©Japan Sport Council



写真10:BMX のデモンストレーションの様子。©Japan Sport Council



写真11:パークール体験の様子。©Japan Sport Council

COVID-19 対策

外国人選手やスタッフの受け入れにあたり、コロナウイルス感染症対策としては、以下となった。

水際対策の国・地域区分の把握と処置:選手を受け入れている期間中は、日本では水際対策強化に係る措置として、国・地域の感染状況によつての受け入れ措置区分が設けられていた。その区分により、手続き、PCR 検査の必要性等全てをしっかりと把握した上で、事前に選手・スタッフに連絡を取り準備をした事がスムーズな日本への入国受け入れに繋がっていた。

ビジネスビザを活用:大会規則として、海外選手・スタッフは全員ビジネスビザでの受け入れとなった。観光ビザではなくビジネスビザを使用する事により、大会時のみの滞在とし、行動範囲も制限できたことで、バブルを作らずにある程度コントロールする事を可能とした。

マスク着用の注意喚起: コロナウイルス対策は各国で異なる為、特にマスクの有無は議論された。だが、日本ではマスクをする事がまだ一般的なルールである事から、選手・スタッフには、日本での現状を説明した上で、「大会を無事に終わらせる為にはマスクをしてもらいたい」と注意喚起を行った。

バスの手配: 海外選手・スタッフは会場周辺の3つのホテルに分かれて滞在していたが、そこからの移動手段は全てバスを大会側が手配した。公共交通機関を使ったり、徒歩での移動となると、また感染症対策がコントロールしづらくなる為、なるべく全ての移動にバスを使用してもらった。

今後の課題・改善点

パルクールという競技、そしてアーバンスポーツの日本全国での普及について、今後の課題はいくつかあげられる。大会運営責任者からのヒヤリングから出てきた課題は、以下となる。

アーバンスポーツの認知度向上、指導者や実施施設など「する」環境の整備、関心をもつ人を増やすための「見る」機会づくり、安全性や公共秩序の観点から規制緩和などがあげられている。また、競技者が増えるなかで安全に実施してもらうためには、指導者の養成は不可欠であり、競技者を支える環境作りも今後の課題となる。

パルクールをはじめとするアーバンスポーツにはまだ「若者の遊び」「騒音」「危険」にまつわるネガティブな印象が持たれている事が多く、イベントを行う事についても近隣住民からの理解を得られない事が多い。解決策のひとつとして、今回のアーバンスポーツの体験イベントのように、地域との交流を深め、理解して受け入れてもらう事が重要である。それと同時並行して、選手への教育も必要不可欠である。比較的新しい競技であることに加え選手の年齢層が若い為、より一層地域との関わり方やスポーツの普及の必要性等を訴える必要が考えられる。

また、日本で普及するにあたり、都会での競技を行うスペースにも課題がある。都会でもできる、と謳われるのがアーバンスポーツの利点ではあるが、パルクールやスケートボード、BMX等のアーバンスポーツを実施できる場所が少ないのが現状である。競技を行える場所としては、新たに施設を整備するのではなく、現在使われている公園、使われていない施設や普段あまり使用していない施設等のスペースでも行えるように色々と工夫を今後施さなければならない。特にスポー

ツ施設では利用種目を制限しているところもあるため、それらの制限緩和も視野に入れる必要がある。各地にある未使用の施設の活用や商店街、中心市街地、大規模商業施設の空きスペースの活用も考えられる。

新しい、急成長中のスポーツとして、連携を深めていかなければならない部分も大いにある。様々な自治体関係者がアーバンスポーツへ取り組むのと一緒に、アーバンスポーツ関連組織との情報共有や連携の強化、イベント運営のノウハウや知識の共有、各団体が取り組む課題解決の事例紹介や課題解決の方策の検討、また自治体同士のネットワーキングの構築等の基盤整備のあり方が重要になる。

今後は幅広い年齢層にも定着させていくにはひと工夫が必要となる。若い年齢層を取り込むのは大事だが、その年代のみとなると対象者も少なくなってしまうので、うまく健康促進等と並行し参加する年齢層を広げなければならない。パルクールに至っては、海外では「シルバーパルクール」(<https://www.pkmove.org/pk-silver/>)という、高齢者向けのパルクールも行われている。今回の世界選手権のような派手な動きはないが、公園や階段等の小さな障害物を安全に登ったり超えたりと、主に体力低下に伴う転倒からの怪我を防ぐ為の体の動きを習得する運動として取り入れるこの分野は、日本でも今後導入が進むことも考えられる。

参照:

1. International Olympic Committee.
<https://olympics.com/ioc>
2. The International Gymnastics Federation.
<https://www.gymnastics.sport/site/pages/disciplines/res-pk.php>
3. パルクール世界選手権. <https://pkwch2022.jp/>
4. MIZUHO / アーバンスポーツ TOKYO2022.
https://www.mizuho-fg.co.jp/company/policy/brand/sports/urban_sports/index.html
5. 東京都 / アーバンスポーツ TOKYO2022.
<https://www.metro.tokyo.lg.jp/tosei/hodohappyo/pres/s/2022/09/15/20.html>
6. 一般社団法人日本アーバンスポーツ支援協議会.
<http://jusc.jp>

7. 東京都 / 有明アーバンスポーツパーク整備運営事業.
<https://www.metro.tokyo.lg.jp/tosei/hodohappyo/pres/s/2022/10/28/10.html>
8. URBAN SPORTS by JUSC. <https://urbansports.app/>
9. PK move / PK Silver. <https://www.pkmove.org/pk-silver/>